

報告

「若手家庭医はどのように進路を選び、 どこで研修をしているのか？」

—家庭医療後期研修の現場からの声—

横林賢一^{※1} 山下大輔^{※2}

※1 医療生協家庭医療学レジデンス・東京/生協浮間診療所

※2 Oregon Health & Science University Family Medicine Residency

キーワード：若手家庭医 家庭医療後期研修プログラム 不安と期待

要旨

【目的】

第21回家庭医療学会学術集会において、「若手家庭医はどのように進路を選び、どこで研修をしているのか？—家庭医療後期研修の現場からの声—」と題したシンポジウムを行った。若手医師がどのような思いで研修を行い、進路を選んでいるのかについて、全国各地で家庭医を目指して研修を続ける医師や研修終了直後の若手医師を交えてのシンポジウムを行ったので、その内容を報告する。

【方法】

シンポジウムは、事前に行ったアンケートの報告、各シンポジストの発表、シンポジスト・会場を交えてのディスカッションの順に行った。

【結果】

会場には若手医師を中心に、学生・指導医も含めた多くの参加者を集め家庭医療研修に対する関心の高さが伺われた。ディスカッションでは、主に家庭医療後期研修の必要性や現時点での制度に対する不安や期待について話し合われた。

【結論】

現在も家庭医療後期研修プログラム認定作業が

進行中であり質の高い標準化されたプログラムが期待されているが、今回のアンケート・シンポジウムによる若手家庭医の生の声を踏まえ、地域・国民のニーズのみならず、学習者の立場も踏まえたプログラム内容が期待される。

目的

2006年5月14日名古屋で開催された第21回家庭医療学会学術集会において、「若手家庭医はどのように進路を選び、どこで研修をしているのか？—家庭医療後期研修の現場からの声—」と題したシンポジウムを行った。このシンポジウムは大会長の大園先生より若手家庭医部会に声を掛けていただき実現した。学会が家庭医療の後期研修認定作業を進める中、学習者となる若手医師がどのような思いで研修を行い、進路を選んでいるのかについて、全国各地で家庭医を目指して研修を続ける医師や研修終了直後の若手医師を交えてのシンポジウムを行ったので、その内容を報告する。

シンポジウムの概要

最初に日本家庭医療学会の進めている、家庭医療後期研修の進行状況などにつき簡単な紹介の後に、シンポジウムに併せてインターネットを使用して行った若手医師対象のアンケートの紹介が行われた。これに引き続き4人のシンポジストより

報告

現在受けている研修や、研修終了後の家庭医としての日常について発表があった。その後、さらに5名のシンポジストを加えてディスカッションに移った。家庭医療後期研修の必要性や現時点での制度に対する不安や期待などについて、シンポジスト・会場を交えての話し合いとなった。

アンケート

シンポジウムに併せてインターネットを使用して行った若手医師対象のアンケートについて報告する。

なお、このアンケート結果は同時に行われた指導医対象のシンポジウムでも菅谷氏より発表された。

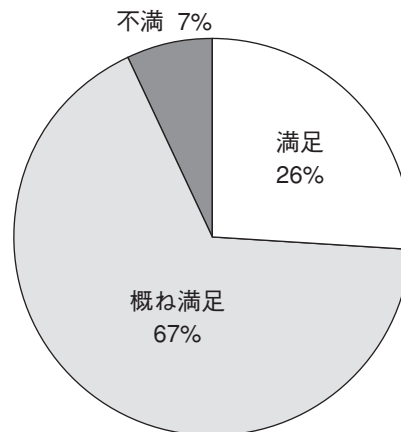
アンケートの目的、対象やアンケート内容については、【資料】を参照。

アンケート回答者の内訳は図1に示す通りである。なお、回答者のうち75%は将来家庭医になることを目指していた。

現在の研修に対する満足度は図2に示すとおり、家庭医療プログラムがあるところでもないところでも概ね満足しているようであった。

家庭医療後期研修プログラムへの参加の意思（現在研修中の方は参加前の段階で）は、76%で参加希望があり、20%はかなり悩みがあるという結果であった（図3）。悩む理由として、病棟管理能力が不足するのではないか、自分が将来働く

《家庭医療プログラムに対する満足度》



《家庭医療プログラムではない研修に対する満足度》

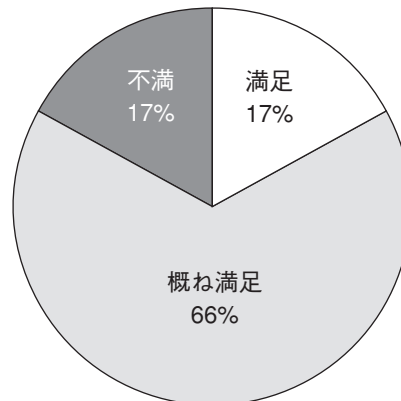


図2 研修プログラムの満足度

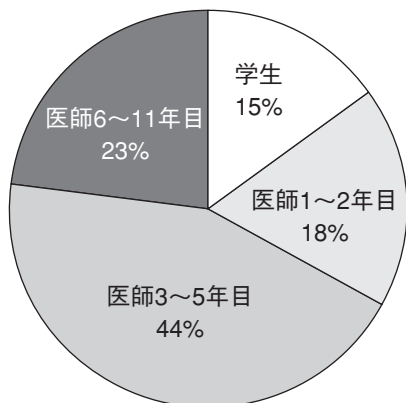


図1 学生・医師の内訳

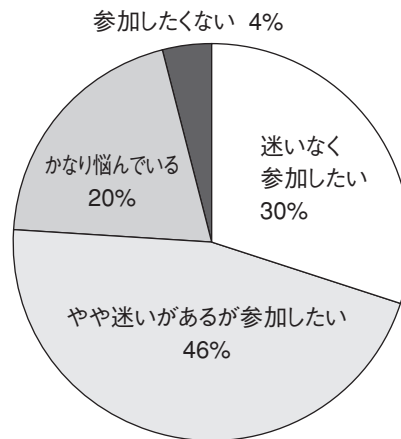


図3 家庭医療後期研修プログラム参加の意思

報告

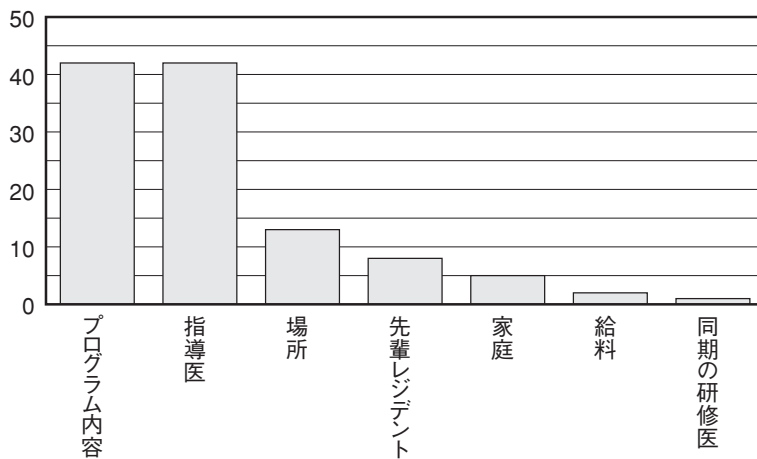


図4 研修プログラム選択の決定因子

つもりの地域で研修をしたいがその地域にはプログラムがない，“専門”を持たないことへの不安、家庭医療自体が確立されていないこと、卒後時間が経っていることなどがあげられた。また図4によるとプログラム選択の決定因子として、プログラム内容や指導医に重点を置いている人が多かった。

家庭医になることに対する不安は7割弱の人が不安を持っており（図5）、家庭医療研修プログラム

に参加したことがある人の73%、参加したことがない人の61%が不安があると答えていた。不安の内容は、専門をもたなくて大丈夫か、周囲の理解が少なすぎる、そもそも家庭医とはということが自分でも理解できていない、アイデンティティーを確立できるか、身分の保障がされていない、やぶ医者になるのではないか、病棟業務や入院管理ができなくなるのではないか、外来だけでいいのか、都市で需要があるのか、同じ目的をもった同僚がいない、周囲にロールモデルがいない、家庭医は本当に日本で受け入れられるのか、家庭医は日本で必要なのか、就職先が少ない、経営が成り立つのか、質の保障をどうするのか、など多岐にわたっていた。そのような不安はプログラムにより解消されると思うかという問いに対しては、解消されるという回答は16%にとどまり、約60%がわからないと回答し、プログラムに対する期待と不安が伺われた（図6）。不安の解消に必要なものとしては、カリキュラム設定、他施設の利害に左右されない就職支援、ロールモデルや仲間との出会い、専門医制度、他の専門医の理解を得ること、家庭医療のセミナーやワークショップの充実、医学部教育への進出などがあげられた。

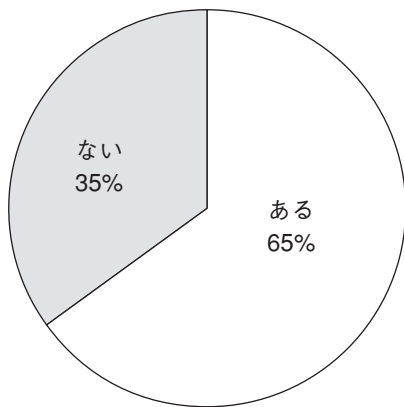


図5 家庭医になることに対する不安

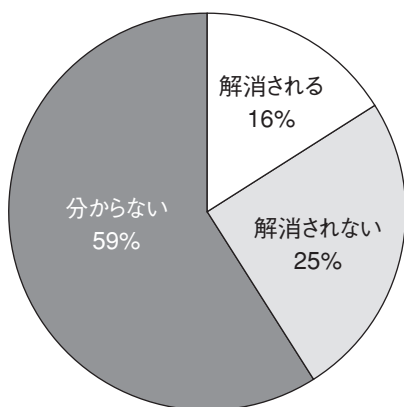


図6 プログラムにより不安は解消されるか

自分の家庭と家庭医との両立に対する不安については56%が不安があると回答し、不安のコメントとして、個人のがんばりで支えられている家庭

医療なので家庭は犠牲になりがちになる、24時間体制の診療所で私生活の時間が確保できるか、プログラムを優先することで単身赴任になるなど配偶者の進路決定にも支障をきたしてしまう、子供ができたときのサポート体制、学会や研修などの時間・休暇がとれるか、などがあげられた。

指導医との関わりについては、周囲にロールモデルがいる割合が70%を占めており、将来的に指導医になりたいと考えている人の割合も81%と高率であった。また、研修医からみた良き指導者の像として、研修医の精神面に重きを置くこと、ある程度自由度を保つことに言及する意見が多かった。

後期研修後の進路（図7）については、決めている～方向性は決まっている人が64%おり、まったく決まっていない人は36%に留まった。

4人のシンポジストからの発表

4人のシンポジストより現在受けている研修や、研修終了後の家庭医としての日常について発表があった。県立広島病院総合診療科の宮本氏は、自治医科大学の義務年限の中で家庭医を目指すようになり、教科書や自ら他の施設に赴きながら研修を組み立てている様子を発表した。そして地域の皆さんと後輩のために新たな研修の道を開ければとの意欲を語った。亀田メディカルセンターの篠原氏は、産婦人科のローテーションでお子さんをとり上げ、その後に引き続いてローテーションをした小児科で乳児検診を引き続いて行った体験などユニークな研修の様子を発表した。岡山県あかいわファミリークリニックの光嶋氏は家庭医の日常について発表した。光嶋氏は卒業すぐに川崎医科大学総合診療部に入り家庭医を目標に6年間の研修を行い、平成13年に開業している。外来、訪問診療、リハビリテーション、学校医、老人ホームの嘱託医、地域の健康教育など多岐にわたる活動をしている毎日を紹介し、家庭医を目指して研修をすることは地域のニーズに対応するためには

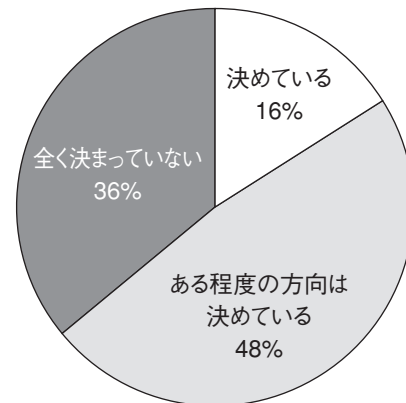


図7 後期研修後の進路について

必須であることを強調した。最後に北海道家庭医療学センターでの研修を終了後、更別村国民健康保険診療所にて家庭医療後期研修に関わりながら診療を行う、山田氏からの発表があった。地域保健・福祉・行政に関わりながらの診療の様子を話し、地域（ホーム）で実績を積み上げその中で地域の信頼を得るということ、地域で学会の認定プログラムや家庭医の認定制度の理解を深めることの重要性について発表した。

ディスカッション

これらの発表の後、さらに5名のシンポジストを加えてディスカッションに移った。主に家庭医療後期研修の必要性や現時点での制度に対する不安や期待について会場を交えて話し合われた。初期研修医にとっても、研修先を決める上で家庭医療・プライマリケア領域の中での理解の不一致が混乱を招いているとの指摘があった。今後しばらくは、家庭医療後期研修プログラムに参加しながら研修を進める人と、参加せずに研修を進める人が出てくる中での配慮の要請についての言及もあった。研修の内容については、家庭医が活動する場に即した研修が必要であることも話し合われた。質の高いプログラムが出来たら参加して良質な家庭医になれるよう頑張りたいという期待の声もある一方、研修後の働き場所や病院勤務が必要になった時、病棟業務を出来なくなるのではとい

報告

う不安もみうけられた。時間が短く、一つ一つの内容につき議論が深められなかったのが残念であった。

会場には若手医師を中心に、学生・指導医も含めた多くの参加者を集め家庭医療研修に対する関心の高さが伺われた。

考察

アンケートやシンポジストからの発表、会場を交えてのディスカッションを通じて、現在家庭医として活躍している人、今後家庭医として活動しようと考えている人たちは、期待と不安の中で奮

闘していること、家庭医療研修に高い関心を持っていることが明らかとなった。現在も家庭医療後期研修プログラム認定作業が進行中であり質の高い標準化されたプログラムが期待されているが、今回のシンポジウムによる若手家庭医の生の声を踏まえ、地域・国民のニーズのみならず、学習者の立場も踏まえたプログラム内容が期待される。

最後に、今回のシンポジウムとアンケート作成にご尽力いただいた菅谷純也先生のご冥福をお祈りいたします。

【資料：アンケートについて】

《目的》家庭医を目指す学生、若手医師たちが何を考えて自分たちの進路を決め、どのような思いを持って研修を進めているのかを明らかにする。

《アンケート送付先》家庭医療学会ML, TFC, 日本の家庭医, ちゅーネットなど、家庭医療に関連のあるメーリングリストなどに送付した。

《対象》家庭医療に興味のある学生や比較的若い医師を主な対象とした。

《形式》メーリングリストを通じてwebにアクセスし、マルチプルチョイスや自由表記で回答することとした。

《調査期間》2006年5月1日～2006年5月7日

《回答数・解析数》74通の回答があり、そのうち有効な72通分を解析した。

《実際のアンケート》

【現在の立場】

1. 卒後年数：卒後（ ）年目
2. 性別：・男 ・女
3. 家庭医療との関わりについて：
 - ・家庭医療を現在実践, 学習している
 - ・学習（本, セミナー, 施設見学など）したことがある
 - ・学習したことはない
4. あなたが将来進もうと考えている道：
 - ・家庭医 ・家庭医以外
5. 現在のあなたの専門, あるいは所属科：（ ）

6. 初期研修先：
- ・家庭医療研修プログラムのある病院
 - ・家庭医療研修プログラムはないが、家庭医療に理解のある病院
 - ・家庭医療研修に理解がない病院
7. 後期研修先（後期研修があった方のみ）：
- ・家庭医療研修プログラムのある病院
 - ・家庭医療研修プログラムはないが、家庭医療に理解のある病院
 - ・家庭医療研修に理解がない病院

【家庭医療後期研修について】

8. 現在家庭医療プログラムに参加しているあるいはしていた人にお聞きします。
- a. そのプログラムに満足していますか？
- ・満足
 - ・改善点はあるが概ね満足
 - ・不満
- b. あなたはどのような研修をしていますか（していましたか）？
9. 家庭医を目指していて、家庭医療プログラムにこれまで参加していない人にお聞きします。
- a. 現在あるいはこれまでの研修に満足していますか？
- ・満足
 - ・改善点はあるが概ね満足
 - ・不満
- b. あなたはどのような研修をしていますか（していましたか）？
10. 家庭医療後期研修プログラムについて（現在研修中の方は、参加前の段階で）、
- a. 迷いなく参加したい
 - ・やや迷いがあるが参加したい
 - ・かなり悩んでいる
 - ・参加したくない
- b. 迷いや悩みがある方へお聞きします。それはどのような悩みや迷いですか？
11. 研修プログラム選択の決定因子の順位をつけてください。
- プログラム内容 場所 指導医 給料 家庭 先輩レジデント

【家庭医に対する不安について】

12. 家庭医になることに不安はありますか？
- ・はい
 - ・いいえ
13. それはどのような不安ですか？
14. 家庭医養成のプログラムに参加すればその不安は解消されると思いますか？
- ・はい
 - ・いいえ
15. 14でいいえとこたえた方はどのようにすれば解消されると思いますか？

【家庭医の家庭について】

16. 将来または現在の自分の家庭において、家庭と家庭医との両立について不安はありますか？
- ・はい
 - ・いいえ
17. 不安がある場合、それはどのような不安ですか？

報告

【指導医について】

18. あなたの周りにロールモデルとなるような存在はいますか？
・はい ・いいえ
19. あなたの周りに良き指導者はいますか？
・はい ・いいえ
20. これまでの研修で指導医に関する問題にはどのようなことがありましたか？
21. 3年間の家庭医療後期研修では，指導医にどのようなことを望みますか？
22. あなたは将来，指導医になりたいと思いますか？
・はい ・いいえ
23. 自分が指導医になるとしたらどのようなことに気をつけたいですか？

【後期研修後について】

24. 後期研修後の進路について，
・決めている ・ある程度の方向は決めている ・全く決まっていない

連絡先：横林賢一

医療生協家庭医療学レジデンシー・東京／
生協浮間診療所

〒115-0051 東京都北区浮間3-22-1

電話 03-3558-8361 FAX 03-3558-8362

E-mail yokobayashiken@hotmail.co.jp

How do young family physicians choose their career and where do they receiving training?

～on-the-spot voices of residents at family medicine～

Kenichi Yokobayashi*¹ Daisuke Yamashita*²

*¹ Family Medicine Residency Programme Japanese Health Cooperative Association/Cooperative Ukima Clinic

*² Oregon Health & Science University Family Medicine Residency

objectives : We held a symposium with junior, senior and graduated residents in Family Medicine to discuss how young family physicians select their career and where they receiving training. This is the report of the symposium.

methods : In the symposium, we presented the results of a questionnaire which was sent to young family physicians regarding their career choice and current training environment. Then several young physicians made presentations about their training and practice. This was followed by discussion with audience regarding issues of family medicine residency.

results : A large audience was present, including students and faculty doctors. They discussed the need for standardized Family Medicine residencies. Hope and uncertainty regarding standardized training were shared.

conclusions : Accreditation for standardized Family Medicine training is in progress. We hope high-quality standardized Family Medicine residency program will be developed which consider needs of communities and patients as well as learner's perspective which was expressed in this questionnaire and the symposium.

key words : Young family physician, Family Medicine residency program, uncertainty and hope.